



すっきりとした町並み。左の建物は1階部分が商店、2階以上が住居。右の建物は貴族の館。 Madrid, Dec. 2015

小さな出窓が造られており、そこには花が飾られていた。洗濯物はどうしているの？と尋ねると、パティオと呼ばれる中庭に面したベランダに干しているとのことだった。

ヨーロッパを歩いていると、町並みの美しさにうっとりさせられることが多い。道路に沿って、気持ちが良いほど真っ直ぐに建ち並ぶ石造りの重厚な建物。特に古くから続く町は、派手な看板やネオ

ココロにサプリ

広報メディア研究所代表 上野 弘子

第119回

美しさの秘密



すっきりと美しい町並みの秘密は、公道に面した側はパブリックスペース、内側のパティオはプライベートスペースと、完全に分けられた建築様式にあった。街の景観は、住民の美意識により守り続けられている。それは決して一朝一夕に生まれたものではなく、何世紀にもわたり親から子へと伝えられてきたものだ。家具や食器、絵画、宝飾品など、形のあるものと同じように、景観への美意識も受け継がれてきた。そういう意識が、伝統を育んできたのだと思う。

しかし、見方を変えると直線的な石造りのファサードは、城壁のように見える。敵が攻めてきた時に、ぴたりと閉じたまま動かない門のようにも見える。侵略の繰り返し歴史をつくってきた、ヨーロッパならではの守りの建築なのかもしれない。どこからでも侵入できそうな日本の家屋は、これまでの安全の賜なのかもしれない。

ンサインは見当たらず、そばまで行かなければ、それがパン屋なのかレストランなのかコンビニエンスショップなのかわからないほどだ。

年末に訪ねたスペインも例外ではなかった。マドリードの市街地には緩い坂道に沿って石造りの古い集合住宅が並んでいる。石の生産地が同じなのか、着色しているのかは不明だが、見事なまでに外壁の色が統一されている。住宅の1階は店舗になっているのだが、看板は控えめに壁面に付けられているだけで、わが国のように歩道側に大きくせり出したり、立て看板が歩行を遮ったりするようなことはない。

商売っ気がないのか、と思うほどさっけない。地元の人に聞いてみると、建物のファサード(正面)に手を加えるには、居住者全員の同意が必要なのだが、目立つ看板は景観を損ねると考えている人が多いとのこと。

もう一つ、気になったのが干し物。わ

マドリードの王宮近くの町を散策していた時、一軒の大きな建物が目に留まった。集合住宅ではなく、明らかに巨大な一軒家だ。日本人ガイドに尋ねると、貴族の館とのことだった。「貴族は生まれながらに貴族。移民は何年暮らしても移民。貴族は裕福で移民は貧しい。格差は、いくら移民が努力してもなくなるらない。伝統は時には残酷で、それに苦しみ不満を抱いている若者は増え続けている」。そう話すガイド自身も、肌の色で差別を受けることが未だにある、と顔をしかめた。

町の中心部のカフェから、屋外に出た時、冬のわずかな陽光を染しむようにテラス席で談笑をしている人々を見かけた。

しかし、そのわずかな数メートル先には、警察車両と武装した警官数人が立ち、警戒していた。パリのテロ以来、各地で厳戒態勢が敷かれている。

それは、ヨーロッパの今を象徴している光景だった。

が国の場合、道路に向かったベランダに干し物が吊るされているのが一般的だ。色とりどりの洗濯物や布団が窓辺で自己主張をしているケースが多く見られる。

しかし、私が訪ねた町では干し物を見かけることはなかった。ファサードには



これはパン屋さん。店の入り口には、散歩中の愛犬のリードをつなぐフックが取り付けられている。 Madrid, Dec. 2015.